横須賀市男女共同参画広報紙

NEW WAVE

ニューウェーブ

50号
2019.3
発行

田浦梅の里

特　集　ジェンダー専門家 大崎麻子さんへの市民サポーターによるインタビュー

トピックス　「男女共同参画フォーラム」レポート

「男女共同参画フォーラム」
男女共同参画型の防災で、あなたの明日を守る方法

開催日：12月７日（金）　会場：横須賀市役所正庁

「サンデーモーニング」のコメンテーターとしてもご活躍中の大崎麻子さんをお招きし、地域防災をテーマに、地域における男女共同参画推進を目的とした講演会を開催しました。今回は講演のなかで、印象に残った言葉を中心にご紹介します。

■「災害に強いコミュニティ」をつくるためには

自然災害は起こってしまうという前提に基づいて、平常時から災害に強いコミュニティをつくっておくことが重要。そのためには、エンパワーメント（一人ひとりが自己決定できる力を身につけること）とレジリエンス（災害にあった後でも回復できるしなやかさ）が欠かせない。エンパワーメントには、「健康」「教育」「生計手段」「社会や政治への参画」の４つが必要。

■ジェンダーの視点

防災・災害対応において、「男性と女性の異なるニーズへの対応は出来ているか」「女性の安全は確保されているか」「男性と女性が平等に災害の備えに関する意思決定に参画できているか」の３つが国際潮流となっている。性別で役割分担をするのではなく、向き不向きを踏まえて、フェアにうまく役割分担していくことが非常に重要。

■災害時に女性が抱える困難

女性は、身体のつくりの違いや避難所生活でのトイレの我慢・不衛生の影響により、泌尿器に問題を抱える場合が多く、それは災害後の健康状態にも及ぶ。また、子ども関連・生理用品等が備蓄になく、支援物資にも要請されないこともあった。

■ジェンダーの視点は女性だけじゃない

男性は、「弱音を吐いてはいけない」と思い、誰にも相談できずにひとりで悩みを抱えてしまう。特に中

高年のひとり住まいの男性は避難所から仮設住宅に移った時など新しい環境に慣れるのが非常に大変。完全に孤立してしまい生活状況も大変で、最終的には亡くなるケースも多い。

■男女共同参画型の防災

地域には様々な人が住んでいるため、災害時のニーズも多種多様。そのニーズを満たすためには、意思決定の場に男性だけでなく女性が参画することが重要。また、避難所のトイレの数やひとりに割り当てられたスペースの広さなど、一人ひとりが尊厳のある避難所生活を送れるようにするための最低基準（スフィア基準）を前提に防災を考えておくことも大切。

人々の安全・安心をどのように確保していくか、地域の備蓄品はどうなっているかなど、日頃から様々な視点で一人ひとりが考えておく必要がある。

男女共同参画推進施設「デュオよこすか」をご利用ください

デュオルーム

交流の場、情報収集の場としてご利用ください。
★ミーティングスペース★関係資料の閲覧★図書の貸し出し
電　　話　０４６－８２２－０８０４
開館時間　月曜日～土曜日　９時～２０時　／日曜日　１０時～１７時
休 館 日　年末年始、臨時休館日

女性のための相談室

女性が日頃から抱える悩みに女性相談員が応じます。
電　　話　０４６－８２８－８１７７
一般相談　月･水･金　９時～１６時（面談は要予約）／　法律相談　原則第３火曜日（予約制・女性弁護士対応）

〒238-0041　横須賀市本町 2–1（横須賀市立総合福祉会館５階）

発行・問合せ／横須賀市　市民部　人権・男女共同参画課　〒238-8550 横須賀市小川町 11　電話 046-822-8228
メール：we-pc@city.yokosuka.kanagawa.jp　HP:https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2420/gender/index.html
◎この広報紙は10,000部発行し、１部あたりの印刷経費は9.72円です。
◎この広報紙は、印刷用の紙へのリサイクルできます。
リサイクル適性 Ⓐ

エコライフ　◀　意識をすれば、必ず変わる　▶　男女共同参画

～女性の活躍とワーク・ライフ・バランスの推進～
ジェンダー専門家 大崎麻子さんの半生から学ぶ

男女共同参画市民サポーターによるインタビュー特集、今回は・・・
国内外で幅広く活動している大崎麻子さんを取材しました。大崎さんにご講演いただいた「男女共同参画フォーラム」の様子は最終ページへ！

大崎さん（左から３人目）と市民サポーター

大崎　麻子（おおさき　あさこ）さん

米国コロンビア大学国際公共政策大学院で国際関係修士号を取得後、国連開発計画（ＵＮＤＰ）に入局。ジェンダー平等と女性のエンパワーメントの推進を担当し、世界各地で女子教育、雇用・起業支援、政治参加の促進、紛争・災害復興などのプロジェクトを手がけた。東日本大震災の被災地での女性支援を機に、日本国内のジェンダー問題にも取り組んでいる。大学院在学中に長男を、国連在職中に長女を出産し、途上国への子連れ出張も多数経験。

Q ジェンダー問題の本質とは？

まず、「男性も女性も、個人の資質ではなく『性別』を理由にして権利や機会が損なわれている状態を、性別に関わりなく、あらゆる選択ができ、責任を分かち合えるような仕組みを作ろう」と国連加盟193カ国の全てが合意しているのがジェンダー平等の実現です。

例えば、お金というパワーを得る「賃金労働」は男性で、そのパワーが得られない家事・子育て・介護などの「ケア労働」は女性という性別役割分業が、資本主義社会での男女間の不平等な力関係を固定化してきました。

ジェンダー平等の概念には、女性も経済力をつけて男性と一緒に家計を担おうという女性の「新たな責任」も含まれています。それは、男性の生き方の選択肢をも広げることにつながると思います。

Q 日本のジェンダー問題とは？

日本の現状をジェンダーギャップ指数で評価すると、149カ国中110位と非常に低いのは、意思決定の場（議会・行政機関・民間企業）における女性の少なさが最大の理由です。意思決定の場に女性が少ないと、女性のニーズや意見が「法律」「政策」「予算配分」に反映できないので、無償のケア労働の過重負担や職場での性差別が解消されないし、女性の尊厳を守る法律もできにくく、女性が自信を持って働き続けるための環境整備も進まないと思います。

今、地方の少子高齢化が進んでいますが、議会の女性割合が低い自治体は、若年女性の流出率が高い。女性が生きにくいからです。これは、国レベルでも同様に起こります。課題としては、ケア労働の責任を家庭内の男女間で分かちあうこと、公共サービスを拡充することがあります。

環境整備や意識改革の近道は、議会（市区町村・都道府県・国）に女性を増やすことです。

そのためには、今現在、地域社会・行政機関・企業などで「権限」を持っている男性リーダーたちが、ジェンダー平等を進めることの意義・メリットに気づき、自分の権限を行使して環境整備に努め、規範を変えていくことが重要です。この変革に取り組む社会は、持続的に活性化して発展し、変革を怠って旧態にとどまる社会は、人口減少が進み、活気を失っていくと思います。

Q 男女共同参画の捉え方は？

男女共同参画とは、男性も女性も意思決定に参加するというニュアンスで、あえて参画という言葉を使っていますが、家庭内・地域社会・企業・国レベルなど社会のあらゆる場でのいろいろな意思決定を、「男性と女性が対等に参加して決めましょう」ということだと思います。

日本は、経済・企業・政治の場で意思決定のポジションに女性が少ないということが一番の問題です。これを是正するためには、環境整備・制度改革の部分と、意識改革・社会規範の変革の部分の２つを変えていかなければならないと思います。

制度改革については、意思決定に影響を行使できる女性比率「最低３割」を掲げていますが、国会などでは、自然に増えるところは世界中をみてもないです。日本の衆議院においても男性が９割の世界なので、残念ながら女性への壁が厚い。まずは、憲法との兼ね合いもなく、政党レベルでできる比例代表の名簿を「男・女、男・女、・・・」の順に並べるところから、手を付ければいいと思います。

Q 現在に至るまでの経緯、きっかけは？

父は新聞記者で、母は家庭を中心にしながらフリーランスで広告の仕事をしていました。両親からは、女性も一生懸命勉強して経済的に自立し、社会のために役立つ人間になりなさいと言われました。

大学院在学中に、長男を妊娠したことをきっかけに、指導教官の勧めもあって、たまたま近くにあった国連の人権センターをインターン先に選びました。卒業後は、大学の先輩の助言を受けて、国連開発計画（ＵＮＤＰ）に就職し、日本という恵まれた環境に生まれ育った私としては、ジェンダーや女性のエンパワーメントに

インタビューの様子

ついて、何か役に立つことがあるならやるしかないと思いました。

Q 仕事と子育ての両立の仕方は？

人の手を借りること、に尽きます。ニューヨークでは、子育てを母親だけではなく、いろいろな人の手を借りてするのが当たり前でした。母親の仕事はプロデューサーのように、ベビーシッターを選んだり、習い事や学校を選んだり、いろいろな人にいろいろな役割を振ることです。

国連は子育てに関するワーク・ライフ・バランスの制度が整っていますが、それにも増して重要だったのは、上司や同僚の理解と応援です。日本に帰って来てよく聞くのが、「制度はあるけれど利用したらみんなから白い目で見られる」、「私たちはなくて大変だったのだから、あなたたちも耐えて頑張れ」というような声です。

幸いなことに、国連ではその制度をどんどん活用するようにと言われたので、ありがたく、子連れ出張や電話会議にしてもらっていました。また、母もよく子どもの面倒を見にニューヨークに来てくれていました。

Q シングルマザーの苦労は？

実際ひとりでやってみて思うのは、２人でやっていた時は、すごくストレスが溜まっていたなということです。

共働きで「家計責任」を担っていましたが、家事や育児などの「家庭責任」は、やはり最終的には母親の責任、父親は「できる範囲で手伝う」という暗黙の了解があったような気がします。そのズレがあってイライラが募っていました。

ひとりになったら、ケア労働の量は確かに増えましたが、いろいろな人の手を借りることで精神的には楽になりました。子どもが小さくて大変な時期は期間限定なので、それさえ乗り越えれば、あとは楽になるしかないという気持ちでやっていました。

Q 働く母親に対して、子どもたちの感じ方は？

子どもたちにとって、母親の仕事と自分たち家庭との間には境界線があまりなかったと思います。

国連時代は、職場近くの保育園や小学校に子どもたちを通わせていました。一緒に通勤していましたし、残業のとき、やむなく保育園から職場に連れて戻っても職場の人たちが相手をしてくれたりしました。仕事仲間のホームパーティも結構あって、子どもたちは母親が仕事している環境を本当によく見ています。また、出張にも連れて行ったりして現状を見ていたので、「世界の子どもたちがハッピーになるのはすごく大事だと思う。ママえらい！もっと頑張って！」と言ってくれていました。

こういった国連時代から、周りの大人たちが、みんな楽しそうだったからか、息子は社会に出ることをすごく楽しみにしていて、今は、地球環境問題の仕事に就いています。

Q 地域との関わり方は？

娘の区立中学校でＰＴＡ会長を２年やりました。ＰＴＡ会長の関連で、自治会、青少年育成委員会、教育委員会、お祭りなど地域の活動がいろいろあって楽しかったです。娘が中学校を卒業した後も、一区民として中学校の評議委員をしたり、青少年育成委員会の理事になったり、運動会や餅つき大会にも出ています。

私は鎌倉出身ですが、ひとりで働き、子育てをするには職住近接が一番だと思い、都心に住みました。子どもを通じて、もともと縁のない地域が地元になりました。今後も、ここにいる市民サポーターの皆さんのように地域活動にも関わっていけたら、子どもたちが成長して子育てが終わった後も、孤独に陥ることなく楽しく生きていけるかなと今期待しているところです。

Q 女性へのメッセージを一言、お願いします！

後輩世代の方々へ

子育て、ＰＴＡ、仕事など、今は大変な時期だと思いますが、それを後の自分の人生のために、たくさん蓄積していく時期だと思います。あとは、ひとりだけで頑張らずに、必要な時に必要な助けを求めることも大事です。どんな助けが必要かを見極める力を高めておきましょう。

先輩世代の方々へ

人生100年時代。これまで一生懸命やってこられたことの経験、いろいろなつながりや、女性のネットワーク（友人、地域活動の仲間、趣味の仲間など）が、これから一番花開いてくる時期だと思います。好奇心を持ち続け、学び続け、生涯現役でいきましょう。そういうシニアの方々が増えたら、私達も希望をもって追いかけていけるので、そういうロールモデルにぜひなっていただきたいです。

～インタビューを終えて～

男女共同参画市民サポーターがインタビューおよび記事作成を行いました。

●大崎さんは国際体験に富んだ半生で培った高邁（こうまい）な信念「男性も女性も性別に関わりなく自分の人生を自己決定できる世界を目指した不断のジェンダー平等・男女共同参画推進の重要性」を諭されました。私は、生命・脳科学の知見も容れた人間性の理念創りの途上で「男性がヒトの基本形である女性の体と脳（精神作用）を部分的に改変された生物であるという科学的事実に鑑み、男女は互いに完璧な代用・代理は務まらず、生命として真に等価な男女双方が住みよい社会は男女共同参画で築くべき宿命を負う」と悟って以来20年、草の根の男女共同参画啓発活動を続けて来たので共感一入（ひとしお）でした。（関　昌夫）

●テレビで拝見するよりずっと気さくな方でした。紙面の都合であまり紹介できませんでしたが、海外のあちこちで仕事して、その仕事がなぜかいつも消去法で、自ら選んだわけではない仕事がライフワークとなり、子育てを通してそれまで縁もゆかりもなかった地が地元化していくさまは、まさに私の人生とそっくりで、一方的に親近感を覚えてしまいました。高齢出産の私はまだ子育て真っ最中ですが、若くして出産した大崎さんは、もうほとんど自由の身。今後益々のご活躍を期待します。（原田　絵里子）

●リベラルな考え方のご両親から、大崎さん、そして２人の子どもさんへと「人や社会に役立つ」ということが、貫かれていると思います。国連という世界的視野の仕事の中で、必死に子育てをする女性の姿を目のあたりにして、世界の女性の幸せに思いを馳せるのは、大崎さんの奥底にはいつも「感謝の心」があるからだと感じます。いろいろな場面で、独り善がりになったり短絡的に諦めたりせず、率直に身近な人に相談し、アドバイスを尊重し、決めたら全力で頑張って、信頼を築き、広げていらしたのだと深く感銘を受けました！（太田　幸枝）